

2019 年度事業報告

私たち所沢市学童クラブの会は、子どもたち一人ひとりに寄り添い、心の声を聴き、丁寧に働きかけること、そして子どもたちと一緒に生活をつくっていくということを大切に、また子どもを真ん中に保護者と協力し、学童保育を通して地域との結びつきを築き上げていくことを40年前から変わらず続けてきました。

安全、安心を土台として、子どもたちが自分らしく、充実した生活をおくることが学童保育であり、子どもを中心として、保護者だけでなく、地域や社会で子どもたちを見守っていこうとする姿勢を大切にしてきました。

注) 学童保育とは、制度や施設を含めた一般的な通称
法律上は、「放課後児童健全育成事業」
施設は、実施する自治体によって名称が違い、
所沢市では、「放課後児童クラブ」
認定資格制度により指導員は「放課後児童支援員」

学童保育をめぐる現状は、国の放課後児童クラブ運営指針・基準の制定、職員の認定資格制度などここ数年で大きく前進しました。3月からの新型コロナウイルスによる休校対応でも、学童保育の存在があらためて社会的に必要不可欠であることが明白になったのではないのでしょうか。

所沢市でも条例化により、公的責任が大きく拡大され、保育料統一、市内のすべてのクラブが所沢市立児童クラブになりました。そうした制度としての前進に伴い、需要の増大からも相まって、市内では絶対的な施設数の不足、クラブの大規模・過密化、入所制限による待機児童の増加などの課題が年々大きくなってきています。

市内では、6年間で民設施設が8カ所新設され、定員のある生活クラブでの定員増を図るなど受入児童数の拡大、大規模過密化の解消へ向けて改善が図られています。しかし、待機児童は増加し、

低学年でも児童クラブに入所できないケースがでてきています。当会が運営する17クラブでは、2019年度4月の児童数は1017名となり、所沢市との協議の上、最大限の児童の受け入れを行ってきました。入所保留児童は6クラブ97名、1クラブの在籍平均児童数は60名と定員を大幅に上回る児童数が在籍しています。

2019年度は、指定管理期間の2年目として、収支構造の改善が大きな使命でもありました。雇用を損なうことなく、単年度の黒字化を目指し、職員の協力のもと、大きく改善することができました。

また3月からは、新型コロナウイルス感染拡大防止策による休校対応に追われることとなりました。すべてのクラブを開設し、対応することができましたが、まだ予断を許さない状況です。この危機で学童保育の社会的役割が改めて再確認されました。

また、待機児童対策、地域貢献として新所沢地域であらたに「緑町三丁目学童保育所」の開設を準備してきました。

1. 子どもたちに生き生きとした、

より豊かな放課後をめざします。

職員部会を中心に、子どもたちとともに生活をつくり、その生活を通して、子どもたちが健やかに成長・発達していけるように支援を行いました。

また、働く保護者への子育て支援・家庭支援に努めてきました。保護者と支援員が連携し、子どもを真ん中に地域に根ざした学童保育を築きあげる努力をしてきました。

各クラブの2019年度保育総括、
職員部会2019年度総括をご覧ください。

2. 大規模化や保留児解決に取り組みます。

所沢市との協議の上、各クラブで最大限の児童の受け入れを行ってきました。保留児童は、6クラブ97名。9クラブが入所率150%を超えており、200%越えも4クラブあります。そのため、長期休業日の児童の一時預かりは、入所率の上昇による安全確保の観点から、今年度も行いませんでした。

このような状況の中でも、青少年課の協力もあり、小学校の体育館の借用をはじめ、熱中症対策のエアコン設置、クラブにおいては生活時間の見直しをはじめとした様々な工夫や努力を行っており、大規模・過密化を言い訳にしない、これまで続けてきた「子どもたちとともに生活をつくる」ことを大切に行ってきました。

民設民営児童クラブについては、安松・和田小学区での開設を目指しましたが、公募の地域ではない事から2019年度は断念しました。また、待機児童の多い新所沢地域での学童クラブ2020年4月開設を目指し、準備を進めてきました。今後も会の財政状況を踏まえ、大規模・過密学区の開設に取り組んでいきます。

3. 学童保育に関わる様々な団体と 協力・連携していきます

学童保育に関わる様々な団体と相互に協力・連携してきました。11月には、保護者会交流会を開催し、各クラブの交流を行いました。交流内容の検討など、今後は事前アンケートなども行い、参加しやすい交流会にしていきます。

また、埼玉県や県連協などが主催した研修会を通して講師や世話人、レポーターを派遣し、積極的に参加してきました。市内学童保育運営事業者とも合同就職説明会などで交流する機会を持ちました。

放課後児童支援員認定資格研修では、クラブの

会の常勤職員全員が履修を終えており、あらたに非常勤職員4名が有資格者となっています。

4. 財政の安定と組織基盤の充実をはかります。

財政・組織の強化を目的に、今後を見据えてのプロジェクトを2018年度からスタートさせています。前年度から引き続いて指定管理の選定結果の分析と今後の会の方向性について検討してきました。

これは、2020年度に予定される指定管理者選定に向けての準備としてだけでなく、今後のクラブの会の在り方をどうしていくかという、大きな視点での検討になっています。これまでの歴史を降り返り、会の理念・目的をあらためて考え、確認していくこととなります。

また、今後も安定して運営していくための検討として、収支を単年度ではなく、3年間をスパンとして捉えていくこととし、

2018年は、職員の「雇用確保」

2019年は、抜本的な「収支構造の改善」

2020年は、「安定的運営」の初年度

と位置づけ、取り組んできました。

職員の雇用を損なうことなく、長く働ける労働環境を作り上げていくことと、財政の健全化という難題は、職員の協力なくして実現できません。就業規則の見直し、給与表の改定を行うことで単年度収支の黒字化、そして2020年度以降の安定的運営に道筋を付けられました。

また、NPO法人としての魅力をあらためて発信し、社会的な認知度を向上させる取り組みとして、ホームページのリニューアル、広報誌「ところざわのがくどう」50号記念号の発行など行ってきました。

パート・アルバイト採用においては、人集めに苦労する業界の中で、50名以上の応募がありました。

5. 地域に貢献します。

各17クラブで、バザーや子どもまつり、地域の行事や活動など様々な場面で参加・協力し、地域の一員としての関係を築く努力をしてきました。

11月に予定されていた学童まつりは雨天のため残念ながら中止となりましたが、10月の市民フェスティバルでは、有志実行委員会を中心に多くの職員、会員、OBの協力が得られ、子ども広場の名物となっているダンボール迷路、25回を迎えた市長杯ベーゴマ大会とともに盛況のうちに終えることができました。

今後も学童保育を通して、地域の方々と結びつき、行事や活動に協力し、地域の一員としての関係を築いていきます。

2019年度 職員部会総括

私たち、放課後児童支援員は、保育者としてのまなざしを磨き、子どもとともに生活をつくり、その生活を通して子どもたちが健やかに成長・発達していけるように支援します。

上記スローガンの基、子どもたち一人ひとりが安心して生活のできる学童保育を目指し、また、常にまなざしを磨きあい、学びあう職員集団を目指し、活動してきました。

今年度も、定例職員会議のはじめの保育エピソード紹介を続けてきました。今年度は、紹介の後に数名から感想などをコメントしてもらうことで、他クラブの保育から学び、まなざしを磨きあう機会となりました。また、この感想を含めたエピソード紹介や内部研修についてのニュースを作成し、保育で大切にしていることや職員が学んでいることを伝えるべく、青少年課へ届けました。

指定管理変更から2年目、早くも次年度に行われる次期選定に向けての準備を指定管理プロジェクトのメンバー中心に進めてきました。

また、次年度から働き方が変更となるのに伴い、午前中の仕事、役割分担の見直しの議論を進めてきましたが、今年度中の見直しは行わず、次年度一年かけて丁寧な議論を行い、見直しを行っていくことを確認しました。

過密、大規模、施設の老朽化等々、課題は山積しています。保留児童は年々増え続けています。低学年の割合が多くなり、異年齢での生活がつくりづらいクラブが増えています。この状況に対して私たちができることは何かを考え、学童保育を必要とする世帯が少しでも学童に入れるように「緑町三丁目学童保育所」を2020年4月より開設するための準備を進めてきました。

さらに年度末には、新型コロナウイルス感染防止対策の小学校休校に伴い、急遽朝から開所することとなり、対応に追われました。

非常に厳しい状況ではありますが、職員同士の支えあいを大切に、今後も一つひとつ課題を乗り越えていきたいです。

1 子どもたちが安心して過ごせ、主体的に関わる生活の場をつくり、集団の中での子ども同士の関わりを大切にした育成支援を行います。

- 各クラブで保育方針・保育計画を立て、実践を振り返りながら、子ども一人ひとりの人格を尊重して育成支援を行ってきました。
- 各地区支援員会議では、保育実践を交流し、保育者としてのまなざしを磨き、課題や成果を共有してきました。また、常に自己研鑽に励み、子どもの育成支援の充実を図ってきました。
- 学校との連携を積極的に図り、子どもの生活の連続性を保障し、育成支援の充実に努め

てきました。また、子どもに関わる関係機関等との情報交換や情報共有、相互交流も大切にしてきました。

- 障がいをもつ子、特別な配慮を必要とする子が、安心して生活でき、子ども同士が生活を通して共に成長できるよう、専門機関等との連携を大切にし、必要な環境整備を行えるよう努めてきました。また、行政や県指連協主催の学習会に積極的に参加し支援員の理解を深めました。
- 子どもが安全に安心して過ごすことができるように環境を整備するとともに、緊急時に適切な対応ができるよう、防災及び防犯対策に努めてきました。
- 実施主体である所沢市との協力関係を基に、育成支援の充実を図ってきました。

2 支援員同士がお互いに支えあい、相互に協力して自己研鑽に励み、育成支援の充実を目指す職員集団をつくります。

- 地区支援員会では、会議の開催や記録の作成等を通じた情報交換や情報共有を図り、事例検討を行うなど相互に協力、切磋琢磨し育成支援の充実を目指してきました。
- 支援員は、常に自己研鑽に励み、子どもの育成支援の充実を図るために、必要な知識及び技能の修得、維持及び向上に努めてきました。
- 育成支援の充実のため、全国学童保育連絡協議会及び埼玉県学童保育連絡協議会及び西武沿線ブロックに主体的に関わってきました。

- 第1回所沢学童保育（児童クラブ・生活クラブ）研究集会の開催に関わり、より充実した育成支援をめざした研究学習を行いました。

3 放課後児童クラブ運営指針を基に、保護者とともに、「学童保育」を守り、発展させていきます。

- 各クラブでは、日々の子どもの姿を伝えることで保護者とともに子どもの育ちを共有し、子育て支援を行うことで保護者の就労を支えてきました。
- また、地域との連携を深め、学童保育にさらなる理解を得られるように努めてきました。